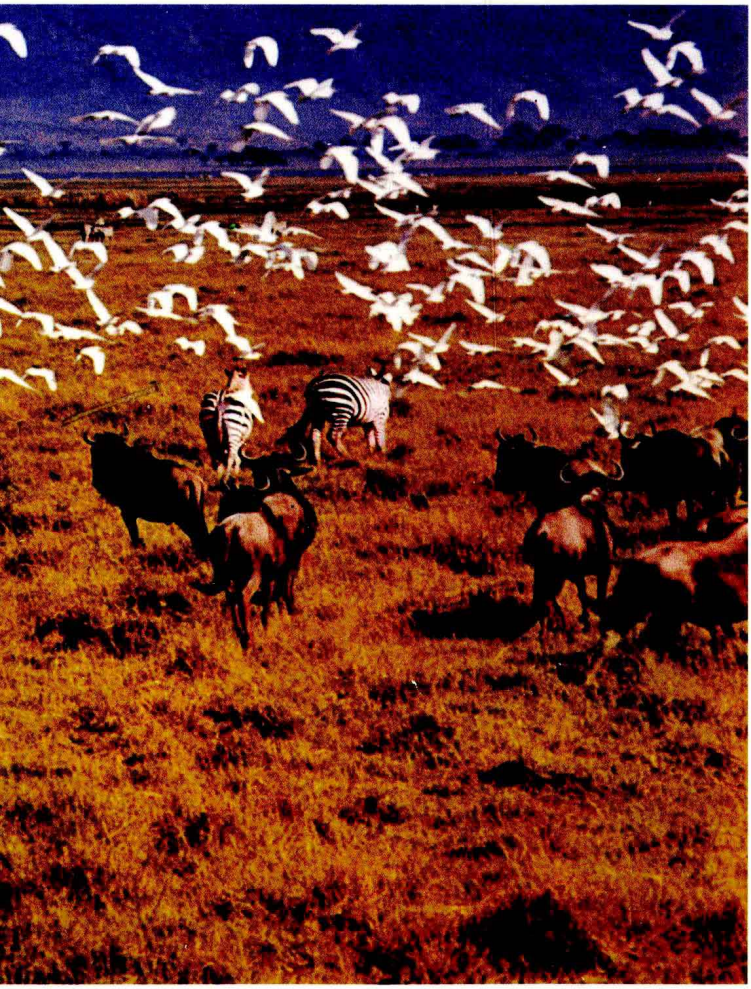
アフリカ散歩

アルベルト・モラヴィア　千種 堅=訳

Passeggiate africane



早川書房

アフリカ散歩

Passeggiate africane

アルベルト・モラヴィア
千種 堅=訳

早川書房

PASSEGGIATE AFRICANE
by Alberto Moravia
Copyright © 1987
by Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani,
Sonzogno, Etas S. p. A., Milan
First published 1988 in Japan
by Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan
by arrangement with
Gruppo Editoriale Fabbri, Bompiani,
Sonzogno, Etas S. p. A.
through Tuttle-Mori Agency, Inc.,
Tokyo.

アフリカ散歩

昭和63年3月10日　初版印刷
昭和63年3月15日　初版発行

*

著　者　A・モラヴィア
訳　者　千　種　　堅
発行者　早　川　　清

*

印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

*

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2—2
電話　東京（252）3111（大代表）
振替　東京・6-47799
定価　1300円
ISBN4-15-203346-0 C0098

〈検印廃止〉

アフリカ散歩

日本語版翻訳権独占
早　川　書　房
© 1988 Hayakawa Publishing, Inc.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

1 先史時代の気配に、わが内なるアフリカの心を見る 5
2 セレンゲティ、地上の楽園で 16
3 バオバブの巨木こそアフリカの真の主人 24
4 アフリカの〝西部〟はマニャーティの村に 34
5 アフリカの心臓部にあるコモ湖 45
6 ゴリラこそ最後のエデンの隠者 58
7 人間そのままに残忍なライオン 67
8 ヘミングウェイ描くサファリから出てきた象 76
9 超高層ビルと森林の同居するザイール 84
10 赤道直下のスーパーで迎える新年 92
11 マユンバ、森林地帯、荒野の魔術の物語 101

12 大洋と森の中、スティーヴンソンを思う 111
13 リーブルヴィルの背後に、裕福な過疎の国が 122
14 シュヴァイツァー博士の足跡をたどって 131
15 そして人間は森を殺す 140
16 ハラレ郊外の黄金のホテル 150
17 アフリカの豪雨の記録 159
18 金属製造の神秘的な記念碑 168
19 ローデスは今も現に、花崗岩の記念碑に 177
20 ヴィクトリア瀑布、〝轟く水煙〟 186
21 カリバ湖畔のこの世のパラダイス 195
訳者あとがき 203

1　先史時代の気配に、わが内なるアフリカの心を見る

セロネーラ、二月。十二時。いま、ルワンダとタンザニアの国境に着いたところ。人影はない。というのも、われわれのようにザイールから、つまり大西洋側から来て、西からタンザニアに入る人はいないからだ。観光でタンザニアに入る正常なルートは東から、つまりインド洋側のダルエスサラーム経由になっている。わざわざこんなことを言うのは、今回の私の旅行が観光的な性格のものではなくて、向こう見ずから出たことを強調するためだ。おそらく、行程という点からすれば、これまでアフリカで試みた最悪の旅だろう。

ということで、人っ子ひとりいない。税関の無人の建物、カゲラ川がコーヒー色で流れ落ち、騒騒しい音を立てている滝をまたぐ橋、あるいはバナナの木の葉が旗のようにはためいている丘陵地帯などには、太陽がきらめき直射している。税関の建物をぐるりと回ってみると、税関吏が日蔭で、襟のボタンをはずし、湯気の立っているじゃがいもの皿を前に、くつろいで坐っていた。口をもぐ

もぐさせながら、国境の通過は昼寝の時間だから中止だとわれわれに告げた。われわれはアフリカ式に、つまり哀願すると同時に居丈高になるというふうにして、抗議をした。税関吏がやっと通過に同意したのは、十分後のこと、これがちょうど、じゃがいもを食べ終わる時間だった。

十三時。タンザニアの丘陵地帯を縫う道を右折左折しながら、まっしぐらに（つまり時速二十キロで）つっ走る。巨大な雨雲がむくむくとわき上がってくる大空を眺めているうちに、ボードレールの散文詩が思い出されたのも全く無理からぬところだ。思い出されるだろうか。「ところで、奇妙な異邦人よ、好きなのは何かな。好きなのは雲……過ぎ行く雲……あちらの、華麗な雲」。そう、〝華麗な〟雲を見るのだったら、小雨季と呼ばれるこの季節にアフリカに来るべきだ。回りにぎざぎざのついた大陸の形にも似て、白く、ふっくらとし、黒っぽい縁取りのついた雲が、紺碧の空を旅している。抱きかかえてきた水分を一部、もうすでに昨日のうちに、ひょっとすると今朝にも、ざっと降らせて、丘陵の緑をあらわに見せてくれている。天地創造の初日にふさわしい、きらりと輝く洗われた緑を。

十四時－十五時－十六時。あいかわらず丘陵地帯をくねくねと進んで行くが、丘陵は一部はバナナ畑として耕されながら、一部はいまなお古代そのままの、雨に濡れた森でおおわれている。赤ちゃけた道、その道に生え出た木々は、女性の巨大な乱れ髪とでも言おうか、そんな蔦を枝にからま

せている。家なく、通行人なく、動物なしだ。私はむきだしの肘を曲げて、ランド・ローヴァーの車窓から突き出したままにしている。夕方までにはすっかり陽焼けして、明日にはやけどになっているかも。

十七時－十八時。二股道。いや三叉路だ。一本はキボンドに向かい、もう一本はルレンゲに、三本目は建造中で閉鎖され、掲示は出ていない。近道だと信じて、ルレンゲの道を行くが、もちろん、間違いだ。これが一番遠回りだった。それも最低ときた。つまり石だらけ、泥だらけの道だ。ここもまた、昨日か今朝がた、雨が降ったにちがいない。

十七時－十八時－十九時。突然、日が暮れるが、下界から暮れ出したというか、森にびっしり生えた茂みから闇が立ち昇って行くが、その闇も狂おしいまでに満天の星が輝きわたる、明るい空までは届かないというところだ。ビハラムロの明かりを探している。どうせ大したことのない新開地だろうが、千キロ四方では都会的なところはそこしかない。闇の中に小さな明かりを幾つか目にして、そこで議論になる、あれは螢だろうか（アフリカにはいまなお螢がいて、パゾリーニ描くイタリアのように、消滅するところまではまだ至っていない）、それとも灯火だろうかと。螢にせよ、灯火にせよ、その明かりはある曲がり角で、すっかり消えてしまい、ふたたび闇の中を走る。

十九時－二十時。バオバブの幹に打ってある道路標識が教えてくれるところによると、われわれはビハラムロに入った。当面の問題は、一夜の宿を貸してくれる伝道所を見つけることで、ホテルなどは考えも及ばない。昔の体験に照らしてみると、伝道所は二つに分類できる。泊めてくれるところと、泊めてくれないところだ。

後者はアフリカ人宣教師が運営しているところで、泊めてくれないのは、多少は白人旅行者に対する不信感もあるが、何といっても極端な貧困のせいである。白人宣教師の運営する伝道所は宣教師の資質や懐具合によって、客あしらいは違ってくるにせよ、必ず泊めてくれる。

二十時－二十一時。ビハラムロにはホテルもある。といっても、トラック運転手向けの〝アメリカ西部〟ふうの宿屋で、彼らは必要とあれば相部屋はおろか、見も知らぬ旅人とベッドをともにするのもいとわない。われわれは伝道所の消息を求めて、一軒の宿を覗いてみた。ホテル・エクセルシオールなどという豪勢な名前をつけているが、平屋のバラックで、窓はガラスの代わりに鉄格子が入っているため、まるで牢獄の雰囲気だ。小さな待合室に入ると、靴屋の仕事台ぐらいの大きさの、客用の小卓が置いてある。微かな明かりの中にその日のメニュー（これが大体はバッファローと〝ピリ・ピリ〟の煮込みである）の大きな貼り紙が見てとれたし、回りはこれまた鉄格子になっていて、ドアである。値の張りすぎるガラスの代わりに使っている。ホテルの人は丁寧に、ビハラムロには伝道所が三つもあると話してくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二十一時－二十二時。教えてもらっても、これが典型的にアフリカ的な教え方で、つまり間違っているため、暗いなかをビハラムロ中を少なくとも一時間、走り回った。最後に、小道に入りこんだところ、原っぱで、明らかに伝道所ふうの、つまり貧しくて粗末な造りの建物が並んでいるところに出た。ところが、やれやれ、宣教師はアフリカ人だ。上手な英語で、司教が来訪中なので、われわれを泊めることはできないと説明した。そこへ当の司教が出てきた。黒い広い額の上は白い縮れ毛、グレーっぽい藤色の服を着て、胸にアメジストの十字架をつけている。宣教師の話では、もっと大きな伝道所で泊めてもらえるとのことだった。左へ曲がって行くこと、一キロほどのところで鐘楼が見つかるだろう、間違えるわけがないと。

二十二時－二十三時。これが出まかせもいいところ、一キロ行っても、十キロ行っても、鐘楼などありはしない。例によって例のごとき議論が始まる。アフリカ人宣教師はまさに悪意をもってわれわれをだましたのか、それとも、悪気はなく、不正確なだけだったのかと。所詮はいかさま野郎……だったのか、それとも間違っただけなのか。議論が終わったのは、一時間、探し回ってついに伝道所を見つけ、その空き地に出たときである。例によって例のごとく犬が吠え、例によって例のごとき、ナポレオン時代の銃で武装したガードマン。突然、アングロサクソン的風貌の、つまり、やたら背が高くて、やたらに痩せた宣教師が現われるが、とんがり頭で、猛禽のような横顔だ。本

当にイギリス人で、それもロンドン出身である。くどくど言わずに、泊まっていただいて結構だが、夕飯は出せないとはっきりしている。時間が遅すぎて、宣教師たちはすませてしまったというのだ。われわれは携帯してきた缶詰のまぐろとサーディン、それに土地のバナナとパパイヤを部屋で食べた。私の部屋は小さくて、飾り気がない。ベッドはハンモックだが、蚊帳はついている。横になる。タンザニアの大統領、ニエレレの書いた社会主義に関する本を、念入りに細かく読み出す。ところが、残念、突然、電気が消える。エネルギー節約のためなのは疑いない。石油ランプをつけようとやってみる。暗闇でマッチ箱を見つける。ところが、空っぽだ。眠りこむ。

七時。ベッドには蚊帳がついているのに、眠っている間にさんざん刺されてしまった。蚊はどうやって蚊帳に入りこんできたのか。不機嫌になって、食堂に行き、宣教師たちと朝食をとる。オートミールの粥、ソーセージ、ベーコン・エッグ、缶詰の肉、塩バター、紅茶、コーヒーだ。白人は二人だけ、ゆうべののっぽと若いのだが、これまたイギリス人で、〝カレッジ〟の先生ふうに知的な容貌で、事実、伝道所の学校で文学を教えている。白人二人はほとんど話さない。一方、アフリカ人宣教師の方はずっと開けっぴろげで、しゃべっている。教皇について何もかも知りたがっている。

七時－八時－九時－十時－十一時－十二時。丘から丘へと走りに走りに走る。上空にはもはやボ

ードレールのあの華麗な雲はなく、煙の幕さながらの雨雲があるばかりだが、頭上あまりにも低く垂れこめて、腕を上げれば触れられそうにみえる。ひどい悪路で、隆起や目には見えない溝があって、そのため始終、バウンドさせられ、ひどい目にあう。そのうちにやっと、ムワンザの平原からそう遠からぬところに出る。先史時代の、穴居人の気配のする平原だ。数百万年前の浸食で、当時、ヴィクトリア湖がここまで延びてきたが、それでできた巨大な記念碑が黄色い草原の中にときどき、そそり立っている。すべすべの、卵型の巨大な石が次々と積み上げられたもので、言ってみれば計算ずくで、不思議なバランスを取っている。迫ってくる雷雨のまばゆい光の中で見ると、恐竜が恐ろしいすがたでさまよっているようにも見えれば、ノアの洪水より昔の巨大な草食動物と肉食動物の凄まじい闘争の様が目に浮かびもする。自然の記念碑がいかにもアフリカならではのしつこいまでの繰り返しをもって、五十キロにわたって相次いだが、やがて突然のようにヴィクトリア湖が、というよりはヴィクトリア海（何しろアイルランドぐらいの大きさがあるのだ）に出た。ほどなくフェリーのところに着く。フェリーに間に合わなかったら、一晩、車の中で待たされるか、でなければ千キロがところ迂回させられるところだった。

十三時。傘も骨だけになりそうな土砂降りの雨、それが恐ろしい蒸し暑さのあとだけに、突如、得も言われぬ爽やかさをもたらしてくれる。こうして、ほっとしたため、うっかり気づかずにいたが、フェリーの発着所はみじめで、小さな汚れたバーのあるバラック建て、不潔で半分壊れた切符

売り場、嵐で壊されたも同然の堤防といった具合だ。黒々と荒れ狂う空は湖に雨を叩きつけるが、どこから射してくるのか分からない鋭い太陽光線が、その雨を黄色く彩る。その雨の下、湖は淀んだ波で湧き立っている。

ふと雨がやんで、絢爛と焼きつくような太陽がかっと照りだす。水溜りから蒸気が上がり、たちまち乾く。アフリカでは恒例のことながら、足止めを食っていた人たちがみんな元通り外に出てくる。何かしら欲しがって手をさしのべる子供たち、頭に籠をのせ、乳呑み児を腕にして、なぜだか微笑んでいる女たち、頭の中で何を考えているのか知らないが、一言も言わずにじっと凝視している男たち。やがて、フェリー・ボートの到着だ。われわれは難なく乗りこむが、車は群がって、運転手たちは先を争っている。やっと、ボートは出発する。私はブリッジに上がって、湖を眺める。暗緑色だ。その中から、まぶしく、非現実的な白い岩が幾つか現われ、白い鳥が飛んで、黒い雲の下に消える。そのうちに、この淀んだ水の広がりを見るため、というよりは見つけるために、一世紀半前、神話的な存在のリヴィングストンにはじまる数多くの探検家、宣教師が貧困や病気で死んでいるのだと思い返してみる。と、何といおうか、幻滅と挫折感を味わう。つまり、アフリカの謎とか何とかいっても、それは単にコミュニケーションや機械を使った交通手段があったか、なかったかの問題にすぎないのではないか！　つまり、ほかの謎にしても、所詮はアフリカの謎と同じで、明日になれば、交通手段の近代化という問題にすぎなかったということになりかねない！　たとえば、宇宙の謎にしても、宇宙飛行士が月面に、つまり一木一草のない、不毛の取るに足りない石こ

ろに下り立った結果、そんな謎など根本的にあり得ないことが予想されるようになった。

十八時。二十年前に訪れたムワンザに着いた。ずっと大きくはなっていたが、商業の交差路という本来の性格は失わずにいて、例によって大体、どんなものでも売っているアメリカ西部風の店があったが、ほとんどインド人やパキスタン人がオーナーである。やっとのことで、最新の、それでいて、もう外壁の崩れたホテルに部屋を見つけたが、これは明らかに観光客向きではなく、アフリカ人が商用で利用していた。早めに床についた。一晩中、雨だ。

七時－八時－九時。油断のならないアスファルト道路を、うっとりと二時間、飛ばしていて、昼すぎにはセレンゲティ国立公園の入口に出られるものと当てにしていた。〝油断のならない〟と言ったのには訳がある。この道路がいきなり山の間の狭い谷にはまりこんでしまい、そのあと、何と昇り坂にかかるところで、けもの道になってしまった。気落ちしてくる。小石と穴だらけの昇り坂は黒い大きな水溜りと、トラックの車輪が泥に作った深いわだちがあって、通れそうもないし、事実、最初、試してみたところ、通れないのが分かる。〝ランド・ローヴァー〟は一メートル進んでは、二メートル後退し、運転手がまっすぐ進めようと努力しても、路上で斜めになり、空転した車輪は柔らかいぬかるみのため、うまく引っかからず、わだちの水に漬かってしまう。動きが取れなくなるぞと思うが、事実、それから間もなく、まさにその通りになる。峠のてっぺんに出たところ、

一ダースほどのトラック、ジープ、乗用車にぶつかった。都会なみの渋滞に巻きこまれて動けなくなっていたのだ。

ずるを決めこもうとする、つまり車と車の間を抜けて行こうとするが、ぬるぬると、びっしり詰まった泥でスリップして、わだちの底に滑りこみ、それっきり動けない。そこで私はランド・ローヴァーを飛び出し、運転手たちがスコップに取り組んでいる間、景色を眺めて気休めにする。タンザニアとケニヤにまたがって暮らしている牛飼いの部族、マサイ族の高地の牧場を望むすばらしい眺めだ。道端から視線はまっすぐ緑の傾斜づたいに、谷底へと落ちて行く。そこここに黒い点々が群れをなして動いているようだ。マサイ族は食糧の乳と血はすべてこの牛に頼っていて、血は直接、牛の血管から吸い取る。おそらくわがアルプスにも同じように孤独で、人里離れて住む、静かな牧童ぐらいはいる。だが、山の純粋さと孤独が熱帯の強烈な明かりと奇妙に調和しているのは、ここ、アフリカの心臓部だけだ。こんなことを考えていると、泥をスコップでさらっている運転手たちや、立ち往生した車のまわりを、悲しそうにうろうろしている観光客のことなど忘れている。二時間少少して、あらためて出発した。

二十二時。国立公園のモーテルが全部集まっているセロネーラに着いたのは夜中だ。驚いたことに、公園は六時に閉まるきまりになっていて、モーテルの従業員はすべて村に帰ってしまい、明日の朝にならないと戻らない。部屋で、毎度のことながら、コンビーフの缶詰で食事をする。ひひの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com